第8章

おわりに

まとめと課題

まとめと課題

ここでは、本研究のまとめとして、現在までの吃音研究や自己意識研究の動向、各地のことばの教室等における実践動向の概観・検討から得られた知見、及びいくつかの実践的取り組みとその議論から得られた知見の整理を行うとともに、今後の課題にも触れておきたい。

１．吃音研究、自己意識研究、及びことばの教室における実践の概観から

吃音のある子どもへの指導・支援を行うにあたり、吃音の抱える問題が何かを整理し、その解決を考える必要がある。そのためには、吃音のある子ども自身だけでなく、つまり個の内部だけを見るのでなく、その子どもが周囲との関係の中でどう過ごしているか、暮らしているか、どう存在しているかに着目する必要がある。第３章で小林氏は社会学的側面という語を用いているが、社会、地域、学校といった比較的大きな視点でのアプローチ、学級や、吃音の子どもを取り巻く身近な子どもや家族といった小さな視点でのアプローチ、双方の視点が重要と考えられる。基本的には吃音の子どもにとってより良い、過ごしやすい集団、社会であるかどうかが問われる。吃音のある子ども自身の状態がどのようになったかという個を評価するのと同様に、集団がどうなったかという集団そのものを評価する教育の実践と研究の蓄積が重要である。この点では、通常の学級での教育活動は大きな意味を持ち、通常の学級とことばの教室の双方の教師の連携・協力を進めながら行う実践活動が重要となる。これは特別支援教育が目指す方向とも重なるものである。

また、絶えず当事者の視点を教育に取り入れること、すなわち吃音当事者からの学びを重視すること、さらに、様々な子どもの思いに沿う意味でも、吃音症状の改善だけでなく多様な指導・支援及び評価の研究・実践も重要である。

吃音のある子どもの自己肯定感を支えていく視点としては、吃音の理解啓発を含めた上記の周囲社会へのアプローチに加えて、子どもが周囲から認められる経験をすること、自分自身のことを学び自己理解を深めていくこと、子どもが周囲に対して自分が役立つ存在であると実感できる経験をすること、子どものよい側面を周囲他者に伝えていくこと、さらには、日々子どもと関わる保護者の思いを支えていくこと等の重要性が指摘された。

２．様々な実践的取り組みの検討から

本研究で取り上げたことばの教室や当事者団体等の実践的取り組みや、吃音の方の体験談などの検討を通して、以下のことが整理された。具体的な事項は各報告にあるのでここでは繰り返さず、ポイントのみ挙げる。

○子どもと関わる教師の側の吃音に対する考え方、吃音への向き合い方、そして自己への向き合い方が問われること。そして吃音をいけないことと捉えず、吃音を避けず、子どもとともに吃音と向き合う姿勢が重要であること。教師は身近な他者として、子どもの吃音を肯定する、子どもを認める存在であること。様々な子どもの悩み、状況に対しともに考える存在であること。

○教師と子どもの共感性を育む実践活動、子どもと周囲の共感性を育む実践活動が重要であること。一緒に夢中になれる、同じ思いを感じられる事物・事象を教師と子どもの間に持ち込むこと。それを他の子どもとの間にも拡げること。共感できる周囲との関係の中では自己を肯定しやすい可能性があること。

○子どもが吃音のことや自己について、主体的に学んでいけるような支援が重要であること。そのためにも出会い、語り合いが重要であること。学んでいくためにテーマを見つけることが重要であること。

○個々の気持ちや状況を考慮する必要はあるが、吃音のことを話題にできること、吃音の話題に蓋をしないことが重要であること。直接「吃音」のことや、「吃音で困ること」でなくても、吃音に触れる、触れられる様々な事象・教材・方法が考えられること。

○上記の、吃音のことを話題にしたり、吃音や自己についての学びを行っていく上で、グループ指導・活動は有効であること。そこには、どもる仲間の存在を知る、自分は大丈夫と思える、語り合うことのよさを知る、仲間と出会い語ることで吃音に対する向き合い方を自分なりに考えることができる、他者の体験談を聞いたり、相互に相談できたり、将来のモデルとなる人と出会える、等のメリットがあること。ことばの教室においては、個別指導の併用、継続性、身近さ、集まりやすさといった強みが、外部の集いの場には、非日常性、多くの出会い、成人吃音者の方との出会い、様々な立場の人との出会い、等の強みがあること。相互のメリットを活かしつつ、補完することが重要であること。

○話し方に対するアプローチは、実践のありよう、教師の考え方によって、吃音のことを知る、自分の吃音と向き合う、自己を理解するための支援にもなること。

今後これらの視点を含んだ多様な実践の形が、各地の研究会等で活発に議論され、より多くの具体的内容・方法が蓄積されていくことを期待したい。

３．今後に向けて

本研究の取り組みを通して、吃音のある子どもが、吃音、自己とうまく折り合っていくことに向けた教育実践の視点と、その具体的な姿・形のいくつかは示し得たものと考える。第２章の最後にも触れたが、自己の捉え方は、基本的には個人的なものである。吃音に対して、自己に対して、人生に対してどのような考え方、スタンスをとろうとも、自己を保てているのであれば問題はない。吃音に対する考え方も、個々それぞれであり、また同じ子ども（人）でも変化するものである。子どもの考え方に沿いつつ、それを基本に様々なことを考え、学び、自分なりの折り合いをつけていくことを支えるほかない。

しかし、吃音のある子ども（人）が、吃音があることで様々な自己の危機、自己否定の状態にあるとしたら支援をすべきであろう。また、そのような自己崩壊、自己否定の状態に向かうのは避けるべきであろう。人はいつも自己を肯定できているわけでもなく、自己を肯定し続けるのは困難であるし（逆に過剰な自己肯定も危険であるが）、それでも自己をなんとか保ちながら暮らしているのが現実であろう。人はどのようにして自己を保っているのか、自己を保つための自分なりの方法等が見い出せることが重要なことと思われる。

このような意味では、個々の子どもにとって、このような状態になることだけは避けたい、という状況にならないような支援、寄り添い方を考え、実践していくことが重要なのかもしれない。

本研究においては、子どもが吃音、自己と向き合うため、考えるための実践のありようを議論したが、先にも述べたとおり、個々の感じ方は千差万別であり、子どもを取り巻く周囲の状況もまた同様に様々で、支援のありようも個によって異なる。したがって、上記のような知見は整理されたが、吃音のある子どもが、自らを学び、吃音があることで人生に負の影響を背負い込まないような生き方を考えていくための、教師の側のつきあい方、支援の在り方は継続して検討していくことが必要と考えられる。この意味でも、より多くの吃音のある方から、個々の吃音や自己に対する考え方や、生き様を学び、資料としていくことは重要であるが、難しさもある。小林（2004）の調査は言友会の会員の方へのアンケートであり、本研究で話を聞かせていただいたのも、当事者の集いの場に参加されている方々であった。すなわち、ある意味限定された吃音の方からの資料収集といえる。当事者団体に入会していない吃音の方や、集いの場に参加していない吃音の方は多いと思われるが、現状では、資料収集や調査は困難である。同様にことばの教室等に通級していない吃音のある子どもも多いことが推測される。自分なりに吃音と折り合えている等、特に日常生活で困っていなければ問題はないが、通常の学級や地域等に対して、相談の場、支援の場、出会いの場等の情報を伝えていくことも重要であろう。そして、特別支援教育の推進・発展の中で、他障害の子どもも含め、通常の学級等の暮らしの中での個々の姿を見て

いくこと、通常の学級等の日常の暮らしの場に視点をおいた研究を進めていくことが課題であろう。

また、実証主義的な観点からは、「自己肯定感」を量的に捉え、本研究で紹介した実践が、それを高めることにつながるのか、定量的な研究の必要性も指摘される課題ではあろう。そのことの議論は今後に譲るとして、吃音のある子どもが、自身の吃音との向き合い方、自己の捉え方を考えていく支えになるような、多くの仲間、先輩との出会いや、ともに考えてくれる大人との出会い、学びの機会に恵まれることを切に願うものである。

引用文献

小林宏明（2004）吃音をもつ人への指導・支援の実態と要望に関する調査：言友会会員を対象として．コミュニケーション障害学，21(2)，88-96.

（牧野泰美）